

自分年金を考える① ～年金制度を知る～

ファイナンシャル・プランナー 水野圭子

最近「老後難民」や「定年までに〇〇万円は必要！」というタイトルを書籍などでも目にするようになってきました。急速な少子高齢化が進む中で、現役の年金生活を送っていらっしゃる方たちのように、この先ずっと同じように年金だけで生活するのは難しいでしょう。しかし漠然とした不安をかかえるのではなく、自分年金として考えて行動することで、この先の資金計画は随分と変わってきます。

年金不安と言われていても、意外にもきちんと理解されていない日本の年金制度について、触れてみたいと思います。

◇国の年金制度は賦課方式！？

「年金」とは毎年決まった額を受け取ることから名前がついたそうです。わが国の年金制度は、『賦課方式』を採用しています。わかりやすく言うと、元気に働ける人から保険料を集め、働けなくなった人にお金を配るのが年金の大まかな仕組みです。

つまり、日本では原則 20 歳になったら国民年金に加入して保険料を払い始めますが、今払っている保険料は、今のおじいちゃん・おばあちゃんの年金原資になっているという事です。1986年に導入されたこの年は、バブルの真最中で、今後も国民所得も子供の数も増えると予測されていた時にできた制度なのです。

しかし日本の少子高齢化はハイスピードで進み、1970年には65歳以上のお年寄り1人に対して20～64歳は8.5人いたけれど、2009年には2.6人となっているのが現状です。2030年には1.7人と予測されています。働く人が払う保険料よりお年寄りが受け取る年金の方が増えているため、2009年から年金に使う税金も国が増やしている状況です。

経済環境や少子高齢化が進み、このまま継続するのに限界がきているため、政府・与党内では、年金財源を『全額税方式』で賄うかどうかの議論が、急浮上しています。

◇年金は将来だけでなく現在でも恩恵を受けられるのです！

さて、2011年の国民年金保険料の納付率は、過去最低の57.63%だそうです。保険料を納付しない理由として経済的に支払えないケースもありますが、年金制度の将来が不安で信用できないからといった声も挙げられています。

確かに国民年金保険料を払った額に対しての年金受取額を予測すると、年々受取額は下

—コラムの無断転写・転載などを禁じます。—

Copyright©2012 Skirr Japan Corporation. All Rights Reserved.

がる傾向ではあります。しかし、年金とは本来お年寄りを家族みんなで助けて養う意味があり、ケガや病気で働けなくなった時にもらえる年金（障害年金）や亡くなった時に残された家族が受け取れる年金（遺族年金）など、ありがたい制度もあるのです。

◇ねんきん定期便は毎年チェック！

自分のもらえる年金はいくら位なのかを試算する上で役立つのは、2009年から始まった「ねんきん定期便」です。誕生日月に送付され、年齢によって通知内容に違いがあります。

◆50歳未満の方・・・加入実績分の試算

◆50歳以上の方・・・将来の見込み試算

35歳、45歳、58歳という説目年齢の場合には、従来通りの過去の履歴すべてが記載されたものが封書で郵送されますので、履歴が正しいか確認が必要です。

年期定期便は2012年からはがき形式になっています。記載内容は少なくなりますので、年金見込み額を確認するのに、日本年金機構の「ねんきんネット」を活用する方法もあります。なお説目年齢（35歳、45歳、58歳）の人には、今まで通りの封書で郵送されます。

日本年金機構HP <http://www.nenkin.go.jp/>

日本人の平均寿命（男性80歳、女性が86歳）を考えると、老後の生活費の心配は高まり、公的年金でカバーできない部分は自助努力が必要です。しかし老後難民などの言葉に惑わされて、よく理解していない投資商品に手を出したりする方もいらっしゃいます。

将来もらえる年金額を試算したり、今後の収入と収支を見える化できる“キャッシュフロー表”などを作成することで、自助努力の準備もしやすいかと思えます。また、生活を見直して支出を減らして貯蓄に回したり、できることから改善するのも大事ですね。